

論文要旨等報告書

氏名	兵頭 誠治
授与した学位	博士
専攻分野の名称	歯学
学位授与の番号	博 乙 第 4 2 8 8 号
学位授与の日付	平成 2 1 年 3 月 2 5 日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者(学位規則第4条第2項該当)
学位論文題名	地域高齢者における口腔保健状況と身体・精神活動の関連性

論文審査委員 教授 森田 学 准教授 目瀬 浩 教授 皆木 省吾

学位論文内容の要旨

【緒言】

世界で最長寿国となった我が国において、超高齢化社会への対応が大きな社会問題となっている。近年、高齢者の全身状態と口腔機能との関連性が注目されるなか、介護予防の三本柱の一つとして口腔機能の向上が盛り込まれ、ADL低下を口腔から予防することに期待が寄せられており、これは歯科医療に課せられた使命でもある。

【目的】

本研究は、近い将来我が国に訪れるであろう超高齢化社会構造に酷似した地域において実態調査を行い、高齢者とりわけ要介護高齢者の口腔保健状況と身体的、精神的要因との関連性を明らかにすることを目的とした。

【方法】

1. 対象

調査は人口約 4000 人、高齢化率 40.1%の超高齢化地域で行った。対象者は要介護高齢者群 32 名、日常生活自立高齢者群 211 名、計 243 名(平均年齢 76.3±9.1 歳)であった。

口腔状態および全身状態、生活環境等について診査ならびに検査測定、問診を行った。心身状態等の評価は医師、歯科口腔領域等の評価は歯科医師、補助的役割として看護師、歯科衛生士が担当した。口腔状態に対する満足度に関して、主観的評価に基づき、良い、悪いの 2 群に判定した。また、Zung の自己評価式抑うつスコア (SDS) を用いて、自己記入に基づき得た回答を分析した。

2. 統計学的解析

1) 要介護高齢者群と自立高齢者群の口腔保健状況の比較

Mann-Whitney の U 検定および平均の差の検定により、両群間の有意差判定を行った。有意水準 5%とした。

2) 要介護高齢者における口腔状態に対する満足度とその関連要因

口腔状態に対する満足度と各項目とを、カイ二乗検定により有意差判定を行った。有意水準 5%とした。さらに目的変数に口腔状態に対する本人の満足度(主観的評価)、説明変数に満足度に関連していると思われる 15 項目を設定し、林式数量化Ⅱ類による多変量解析を行った。

3) 要介護高齢者における精神活動と歯科的要因の関連性

目的変数を抑うつスコア (SDS)、説明変数には精神活動に関連していると思われる 12 項目の要因を設定し重回帰分析を行った。

なお、全てのデータ解析には SPSS(Ver11.0)を使用した。

【結果】

1) 要介護高齢者群と自立高齢者群の心身および口腔保健状況の比較

Mann-Whitney の U 検定および平均の差の検定により、心身状況、口腔機能障害、口腔衛生状況等において両群間に有意差をみとめた。

2) 要介護高齢者の口腔状態に関する満足度とその関連要因

保存治療、歯周治療、義歯清掃指導を必要とする者と口腔状態に対する満足度との間に有意差をみとめた ($p < 0.05$)。口腔機能では、咀嚼能力 ($p < 0.01$) において有意差をみとめ、また咬合圧測定器による測定値では概ね平均値である 60 にて 2 つのカテゴリーに区切り比較したところ、有意差をみとめた ($p < 0.01$)。

林式数量化Ⅱ類による多変量解析の結果、相関比 0.82 と高い分析精度が得られ、自立度(偏相関係数 0.51)、食事形態(0.44)、咀嚼能力(0.38)が関連要因として示唆された。

3) 要介護高齢者における抑うつスコアと歯科的要因

重回帰分析の結果、決定係数 $R^2 = 0.609$ と精度は良く、長寿願望 ($\beta = 0.52, p < 0.01$)、口腔乾燥 ($\beta = 0.41, p < 0.05$) において抑うつスコアとの関連性をみとめた。

【考察】

本調査の結果、要介護高齢者の大多数が脳血管疾患等の発症によって生活機能障害となり、要介護状態となったことが伺えた。そして、自立高齢者群と要介護高齢者群を比較すると、身体的、精神的特徴の有意差は明らかであった。

そこで、どのような要因が要介護高齢者の口腔状態に対する満足度に関与しているのか検討したところ、自立度、咀嚼能力、口腔衛生状況に関する項目が挙げられた。これは、口腔清掃状態が良好に保たれ、自身の咀嚼能力に適した食物を的確に咀嚼でき、食事をおいしく感じられる者ほど、口腔状態の調子が良く、満足度が高い傾向にあることを示唆している。義歯不適合などにより痛くて噛めない、食物を噛み切れないなどが大半で、噛めないから口腔状態の調子が悪い、満足していない、という自己評価に繋がったものと思われる。

抑うつスコアと歯科的要因との関連性を検討したところ、長寿願望、口腔乾燥が挙げられた。これは、長寿願望が強い者ほど、加齢による心身の機能低下と共に、老後や将来への不安を抱くようになり、精神状態への影響を惹起したものと思われる。また、心配や緊張などのストレスが自律神経系に影響を与え、唾液分泌量の低下を招くとされ、抑うつ傾向と口腔乾燥の関連性が示唆された。このような背景には、加齢によって死の確率は対数的に増加し、生体機能は直線的に低下し、このために種々のストレスによる変化から回復する能力、すなわち予備力の低下をきたすと考えられ、高齢期の複雑化する社会環境による種々のストレスが関与したものと思われる。

高齢者医療に携わる者は、このことを念頭において、臓器のみを診るのではなく、身体、精神機能、社会環境にまで及ぶ広い視野が必要である。そして、歯科医師に依るところの大きい、口腔乾燥への対応が更に重要になってくるものと思われる。

本調査において、高齢者の口腔機能を維持増進することは、口腔状態への満足度が改善され、精神活動への好影響が得られ、生きがいや楽しみなどが生まれ、ひいては QOL の向上をも得られる可能性が示唆された。

論文審査結果の要旨

高齢者における口腔状態と全身状態の関連性が明らかになり、QOLの維持・増進に口腔保健の重要性がきわめて高いことは知られているが、高齢者、とりわけ要介護高齢者の口腔状態と精神心理面との関連性については未だ明確でない。

そこで本研究では、近い将来、我が国に訪れるであろう超高齢社会構造に極めて酷似した地域において実態調査を行い、要介護高齢者と日常生活自立高齢者の口腔および心身状況を比較することにより、口腔機能と心身状況との関連性を再検証し、更に高齢者の口腔状態と精神活動との関連要因を明らかにすることにより、今後の高齢者歯科医療の目指すべき指針の究明を目的とし、調査・検討を行った。

結果、以下の結論を得た。

1. 要介護高齢者群と自立高齢者群の心身および口腔状態
自立高齢者もさることながら、要介護高齢者の口腔状態は劣悪な状態にあり歯科医療の更なる介入の必要性が示唆された。
2. 高齢者の口腔満足度に関連する要因
関連要因として、咀嚼機能や口腔衛生に関する項目が示唆された。
3. 高齢者の精神活動に関連する要因
要介護高齢者において、口腔乾燥と抑うつ傾向との関連性が示唆された。

以上より、今後の高齢者歯科医療には咀嚼機能や口腔衛生のみならず、心理的側面も含んだ新たな取り組みが必要であるとの知見は価値あるものであり、本申請論文は博士(歯学)の学位論文に値すると考えられる。